兵庫県におけるオサムシの分布（1）

高橋 塩郎


何分浅学未熟者故多くの誤り、脱落等あるやに思われる。大方諸賢の御指導、御教示を頂くことができればこれに過ぎることはない。

Family Carabidae
オサムシ科
Subfamily Carabinae
オサムシ亜科

1. Apomopterus porrecticolis kansaiensis (Nakane, 1961)

ホソアオクロナガオサムシ（図 1, 2）

本種は県下では分布が限定されているように思われるが前報で述べたが、その後淡路島からの記録も見られるし、瀬戸内海に面した海岸線近くに

図 1. Apomopterus porrecticolis kansaiensis (Nakane, 1961)

ホソアオクロナガオサムシ

左♂ 体長26mm 右♀ 体長31mm
佐用郡大窪山産 11. III. 1977 採。

産地．津名郡北淡町常隆寺（大草,1993）。川辺郡
名合川町杉生新田～能勢町天王南方 alt.490～500m
名合川町上阿古谷三草山（東稲線）～神山
alt.400～330m
大原山～柏原 alt.450m
大野山～
きべりはむし 26(2) 1998


2. *Calosoma maximovici* (Morawitz, 1863)

クロカタピロオサムシ (図3, 4)

本種は, Bates によって Hiogo に産するとした古い記載がある (1873). 当時の Hiogo は現在の神戸市内のことであって筆者も神戸市内で採集しているが, 極めて稀なようである. 澤尻島からは最近記録がある. 古くから川西市笠部付近には多産することが知られていたが, 開発で様子の変化が

図3. *Calosoma maximovici* (Morawitz, 1863)

図4. クロカタピロオサムシの分布

（ ）は筆者採集標本. 原則として標本は県立人と自然の博物館保管, 採集例の多いものは1例のみ掲げて他はetc.として省略する.
知られているが、後翅が発達しているので燈火に飛来することも知られている。筆者の採集は何処　とも道路上を歩いていくものを採集している。

3. Campalita chinense (Kirby,1818)
エゾカタピロオサムシ 図5, 6
本種は兵庫県下では分布も多く、特に海岸線に近い地域にはとくに多く分布しているようである。
永橋によってと調査のポイントとしては、まず河川の下流に架かる橋の絶壁灯が挙げられている。
三木市では日中は欄干の隙間等に潜み、夜になると出てくるのが観察されている（1994）。
電灯に飛来したものと採集した報告が多いため、筆者の採集も全部電灯に飛来したものである。クロカタピロオサムシと同じように後翅が発達しているからである。

4. Carabus daisen daisen (Nakane,1953)
ダイセンオサムシ 図7, 8
兵庫県からの初めての記録は日浦勇らによる近畿オザムクルーグループによる“近畿地方のオザムクル”（大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第11集,1979）においてである。その後、筆者は浜坂町の宇都領神社の裏手で採集した1匹を採集した。最近、永原嘉之は兵庫県鳴尾ノ川戸の産地で多くの産体を報告されている（1996,IRATSUME, No.20）。現在の兵庫県下では兵庫県に知られてい るだけである。

産地。兵庫県浜坂町宇都領神社（17・17.X.1978）西越市春来峠の池畑（近畿, 1979）

5. Carabus dehaanii Chaudhuri, 1848

オオザムクル

本種はオオザムクルとともに兵庫県下全域に広く分布しており、個体数の多い少ないの違いはあってもままだ分布が少ないものであると考えられる。越冬に際しては、頭部を外方に向けている。

分布は日本の本州中部以西、四国、九州及び周辺島嶼となっている。井村有希博士によれば（1994）ミトコンドリアDNAの解析結果によれば、中部・関西地方の“オオザムクル”と中国地方の“オオザムクル”とはそれぞれ全く別の系統に属し、形態上、これまでの種と見られていた本種の中に複数の種が混じっている可能性があるという説明がある。

岐阜県[富永, 1998]. 三原郡松尾町[久松, 1973], 高岡市[川瀬, 1979], 丹羽郡吉野町[豊田, 1978, 桂, 1971, 川瀬, 1979]. 同山頂南側[500〜600m[近畿, 1979]. 川辺町[高梁町杉生新田(東方)〜高橋北稜線 500m, 杉生新田〜能勢町天王(南方) 490〜500m, 上村新田 180m[近畿, 1979]. 川西市上之町北東上杉村〜妙見山[370〜520m, 深山寺〜最霊山 150m, 興福寺山[1979], 横谷, 紫生[仲田, 1978, 1982]. ときわ台(36°, 28.3°, 1979). 笹部〜初谷川 150m. 笹部[近畿, 1979, 仲田, 1978]. 宝塚市鳥取山尾根〜鳥取山 350〜400m, 鳥取ダム〜十木社 310m, 最明寺東北 150〜180m, 富士崎〜中山寺奥院 150〜180m, 砂原山〜横尾寺 430〜500m, 富士岩〜中山 250〜300m, 390〜400m, 240〜450m[近畿, 1979]. 中山寺奥院 300〜350m, 立合新田東 250m, 十分辻〜立合新田 330m[近畿, 1979]. 岩倉山(13°22′, 9°31′, 1979). 西宮市北部有馬地区, 六甲山地[日浦, 浅井, 1961]. 鳴林寺〜観音堂 260〜330m, 鳴林寺〜旭滝 350〜400m, 旭滝〜観音山 400〜450m, 450〜530m, 観音堂〜旭滝 350〜450m, 鳴林寺, 同道路〜バス停留所, 観音山 350〜400m, 400〜500m, 神戸 300〜380m, 450〜500m, 船坂台, 山口町下田三ヶ所平 320m, 東久保〜焼野下 300〜380m, 神戸稜 500〜550m, 田辺〜平生 450〜524m, 山口平 290m, 山口町船坂台〜三ケ所平 400m[近畿, 1979]. 岩戸山 310m, 520m, 六甲山東〜多福山南谷〜不便山 600m[近畿, 1979]. 神戸市[中根, 1952]. 西宮市荒神山西面 450m[近畿, 1979]. 五甲山[下山, 1939], 岩戸山[下山, 1938, etc]. 鳴林寺〜観音堂 280m, 神戸[下山, 1938, etc]. 6°20′, 20°19′, 1981]. 鈴蘭台大山公園[13°, 16.4°, 1987]. 萩野町[13°7′, 14°11′, 1975, etc]. 丹生川〜坂本 350〜510m, 稲荷かつ茅山北西斜面 300〜500m, 同〜岩戸谷 410m[近畿, 1975]. 長州山[13°7′, 7°V, 1982]. 岩戸谷[13°7′, 20°19′, 1981]. 鈴谷平田[13°7′, 20°19′, 1981].

7. Carabus japonicus chugokuensis (Nakane,1961)


Paratypes : 8♂,♀, from Shimane, Hiroshima, Okayama and Hyogo Prefecture.

とされているParatypesの産地は一切表示されていない。1962年の中央河岸帯の「日本昆虫分類図説第2巻, 第3部 朝鮮図 オサムシ科」(北陸館・東京)の中で, Sasayama-Hyogo と兵庫県産のみのは多紀郡篠山産のものであることがわかった。

8. Carabus maiyanus maiyanus Bates,1873

マヤサンオサムシ

種名のごとく神戸の摩耶山産で記載された種である. 原記載には "Found only at Moon temple (Maiyanan), Kobe: at 2,000 feet" とある (Trans. Ent. Soc. London, 1873-Part.II:232) (Moon-temple は 俊利(とうり)天上寺のことで, 当時の位置と現在の位置は違う)

淡路島にはまだ産地は知れていないが, 兵庫県下には広く分布しているようだ. 特に六甲山系には多い. ただし, この基亜種は本州中部から兵庫までで, 鳥取県には分布していないといわれている. 基亜種の系列には, 北陸と養老地域の2亜種に含まれ, 分布域南限の鈴鹿山脈西東麓, 信楽山地, 三重県宮川上流, 三重県鴨方付近などによりもう一つの系列が形成されると．

トピワリ～東お多福山バス停 alt.480m，六甲山東お多福山雨ヶ峰～本庄橋 alt.600m [近畿，1979]。


図13. Carabus maiyasanus maiyasanus Bates,1873

マヤサンオサムシ

神戸市再度山産 ♀ ♂ 20.VI.1979

図14. マヤサンオサムシの分布

キベラハムシを日本で一番初めに採集したのは
ジョージ・ルイスではないのか？
高橋 寿郎

筆者は本誌上に“キベラハムシが初めて日本で
記録されたころの想い出”なる報文を発表して頂
いた（キベラはむしVo.25,No.2: 44-47,1997）。その
中でキベラハムシが初めて図説されたのが加藤正
世博士の分類日本原色図鑑第9輯,p.23-46にカラ
ーで図説されたものであると紹介し、当然その頃
より本種の神戸での記録は見ることが出来るよう
になった。だがそれ以前何時神戸でこのキベラ
ハムシがいたのかと雲ったことは全く謎のままで
あり、漠然と明治の終わり頃ではないかと考えて
いたのであるが、最近、偶然黒沢良彦博士が、よく
知られている素木（しらき）標本についての詳しい
解説文を書いておられるのをゆっくり読む機会を
持った（甲虫ニュースNo.50: 7-13,No.51: 5-6,
1980）。即ち、素木標本として知られている標本は、
大正5年（1916）当時の台湾総督府農事試験場技師
であった素木得一博士が、3年間のロンドン留学
を経て帰国されたが、帰国に際し膨大な量の日
本内地や東南アジア産の甲虫標本を持ち帰られた。

日本内地産の標本は有名なジョージ・ルイス
（George Lewis）の採集品で、彼自身や他の甲虫学者
によって記載された多くの種類のタイプ標本を含
んでいた（この標本がどのような経緯で入手された
のかは全く不明である）。これらの標本の産地を
示すラベルは素木得一博士が帰国後台北におい
てすべて外され、その代わりに台湾内の特定の数
か所の地名を示すラベルが付けられたのことと、
このような大がかりな意識的なラベルの付け替え
が、いかなる目的のもとにされたのか、これま
た全く謎である。

さらに、黒沢良彦博士の解説は続く。"降って大
正11年（1922）、当時台湾に在って旅人の若き日
の加藤正世博士は、素木得一博士の尽力により、
台湾総督府農事試験場に奉職した。同博士は